

2020年3月15日（日）「種を蒔く人と育てる人」

Ⅱ テモテ 1:1-8（口語訳）

1 神の御旨により、キリスト・イエスにあるいのちの約束によって立てられたキリスト・イエスの使徒パウロから、2 愛する子テモテへ。父なる神とわたしたちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とが、あなたにあるように。3 わたしは、日夜、祈の中で、絶えずあなたのことを思い出しては、きよい良心をもって先祖以来つかえている神に感謝している。4 わたしは、あなたの涙をおぼえており、あなたに会って喜びで満たされたいと、切に願っている。5 また、あなたがいただいている偽りのない信仰を思い起している。この信仰は、まずあなたの祖母ロイスとあなたの母ユニケとに宿ったものであったが、今あなたにも宿っていると、わたしは確信している。6 こういうわけで、あなたに注意したい。わたしの按手によって内にいただいた神の賜物を、再び燃えたたせなさい。7 というのは、神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。8 だから、あなたは、わたしたちの主のあかしをすることや、わたしが主の囚人であることを、決して恥ずかしく思ってはならない。むしろ、神の力にささえられて、福音のために、わたしと苦しみを共にしてほしい。

【序論】

今日は年2回行なっている、多摩ニュータウンキリスト教会と東伏見福音キリスト教会の講壇交換となります。当初の予定では、この礼拝にコーウィン先生のご家族も出席されるはずで、そのことを念頭に置いてこの説教を準備していたのですが、新型コロナウイルスの影響でいられなくなってしまいました。ですが、せっかくこの日のために準備をした説教ですし、多摩ニュータウンキリスト教会の皆様にも是非知っていただきたい内容でありますので、そのままを語らせていただきます。

コーウィン先生のことを直接ご存知の方がどれくらいいらっしゃるかわかりませんが、私たちの団体「東京福音センター」の基礎を築いてくださったご夫妻を覚え、この説教を通して感謝の気持ちを表したいと考えております。コーウィン先生は2018年6月25日、エロウィズ夫人は2019年12月1日に天に召されました。昨年10月に開催された記念礼拝および東京ティラナスホール60周年記念会にも出席しましたが、それでも、先生ご夫妻が召されたことに対する実感が私の中で不十分であることを今日まで感じてきました。そこで、現在私がこの団体の働きの一部を担う者とされていることと、コーウィン先生との関わりの意味を考え、整理しておきたいと思った次第です。今日は、このような構成でお話しさせていただきます。

- ①幼少時代のコーウィン先生ご夫妻の思い出
- ②東京福音センターの歴史
- ③献身への道筋
- ④テモテの立ち位置で

本論 1. 幼少時代のコーウィン先生ご夫妻の思い出

私は 1979 年に、多摩ニュータウンの地に生まれましたが、それはこの教会の開拓伝道が始まって 4 年ほど経った、旧会堂の建設が進められていた時期であります。私の父、修武は腎不全となり、私の誕生のとき「僕の健康をこの子にすべて与えたような気持ちだ」と言ったそうです。いつ頃からか記憶は定かではありませんが、旧会堂の 2 階に住んでいた時期、時々アメリカ人の宣教師ご夫妻が来訪されるのを認識するようになりました。チャック（コーウィン先生の愛称）の背の高さと、足の大きさにびっくりしたのを覚えています。自慢にもなりません、私はチャックの靴を履いたこともあるのです。外国人のお客様が結構多い家庭ではありましたが、その中でもチャックと両親は特別な関係に見えました。両親の結婚式の写真が寝室に飾ってありましたが、そこには同じ人物が司式をしている様子が映っていました。ただ、子どもの目から見て、父とチャックが「仲良し」であるかどうかは、よく分かりませんでした。2 階のリビングで延々と何かを話し合っている様子を、恐る恐るカーテン越しに覗いていたものです。父も強い人でしたが、チャックも負けず劣らず曲げない人で、時々談笑もありながら、議論が平行線を辿っているように見えなくもありませんでした。エロウィズさんは、いつも私をやさしい目で見つめ、「よしきちゃん」とゆっくり丁寧な日本語で話しかけてくださいました。彼女が作ってくれたブルーベリーケーキの味と、香水の香りが今でもはっきりと記憶に残っています。

本論 2. 東京福音センターの歴史

コーウィン先生は、1945 年、20 歳のとき、日本での戦後処理の任務に就くため、海軍少尉として横須賀に上陸されました。翌年、箱根で女子中学生 3 人に出会い、日本宣教のビジョンが与えられたといえます。1952 年、27 歳の頃、宣教師として来日し、福音伝道教団との協力の下、神学校での教鞭をとるかたわら、群馬県での会堂建設に当たられました。その後、1956 年の帰国休暇を経て、都会での学生伝道の志を得られました。弟子訓練をするために、宣教師が若者のすぐ傍に住む必要を感じ、学生寮を構想さ

れました。東京都保谷市（現西東京市）の地主、保谷源三さんの農地の一角を借り受け、家族が住む家「グリーンハウス」を建てられました。グリーンハウスは現在はありませんが、私の記憶の中に残っています。ある日、ご長男のポールさんが保谷さんの畑の手伝いをしたことがきっかけとなり、学生寮の構想を話す機会が与えられました。その結果、借地の権利金を、頭金だけ払い、残りを月払いにするという条件で土地を借りられることになりました。アメリカに協力者を得て、1959年に木造バラック2階建ての学生寮がグリーンハウスの隣に完成しました。それを「働きの門キリスト教会・学生寮」と命名し、働きの4本柱を定めました。

①週3日、早朝の聖書の学び会に参加すること

②週1回、外部講師を招いて、夜7時から2時間の聖書講義（レイマンスクール）を受講すること

③心身を鍛えるために、週3時間、何らかの運動に励むこと

④夏休み中、キャラバン伝道に参加すること

このような流れの中で、1964年に奥村修武が入寮、更に1968年にY兄、1974年にN先生が次々と入寮していかれました。Y兄が入寮された年に、バラックだった建物が鉄筋コンクリート3階建てに建て替えられ、「東京クリスチャン学寮」と改名されました。

1974年に、コーウィン先生は多摩ニュータウンで「英語と聖書を学ぶ集い」を開始され、K兄が初穂として受洗されました。その後、米国に留学していた奥村修武と正子夫人が帰国し、寮のスタッフとしての奉仕に加わります。修武は教会形成のビジョンを持っていましたので、翌年1975年に多摩ニュータウン永山駅前が開拓伝道を開始しました。永山病院の近くに「サマリヤ館」という建物があったのを何となく覚えています。私の兄と姉はそこでの礼拝を経験しています。

修武は「牧書房」という古本屋を経営しながら開拓伝道を進めていましたが、実は私の最も古い記憶は1歳の頃、牧書房の2階の水道で母に抱かれて水を飲んだこと（階段を上った所に粗末な水道があったのです）。その後間もなく、奥村一家は旧会堂の2階に移り住みました。1983年からN先生が教会に住み込みで神学校に通われるようになり、ご一家が道路側の狭い部屋で生活され、お風呂を共有していたのを覚えています。修武は1978年に腎不全と診断され、余命3年と言われておりましたので、早々に後任を立てる必要が生じていました。その後、東京クリスチャン学寮の学生であられたN先生が、大学卒業後5年間建築事務所に勤務された後、K姉との結婚の経緯の中で献身されたのです。

1986年にN先生が副牧師に就任されてから、1994年に修武が東伏見福音キリスト教会の開拓に踏み切るまでの8年間、共同牧会の時期を過ごしました。

本論 3. 献身への道筋

さて、このような環境に生まれ育った私は、保育園に通っていた頃から、将来の夢は牧師だと語っていました。それは自分でもよく覚えています。不思議なことに、兄の口からは一度もそれを聞いたことがありませんでした。高校時代に進路で悩んでおりましたが、幼少の頃からの夢を思い出し、神学大学を受験することにしました。ただ、それはまだ「献身」と言えるようなものではなく、献身が何であるかも分かっていませんでした。中学時代に信仰告白をしましたが、本当の意味では福音を理解していなかったばかりか、その後の信仰成長もほとんどないまま、東京基督教大学に進学したのです。今思えば、入学できたこと自体が奇跡でありました。しかし、大学時代に良い信仰の友・先輩・先生に恵まれ、曲りなりにも神学を学んでいくうちに、罪の赦しをはっきりと体感することがありました。そして、将来への献身の思いが本物になっていきました。大学3年の頃、初めて礼拝で奨励をし、御言葉を取り次ぐことの重さを知りました。大学卒業後は、東京キリスト神学校の音楽科に進み、その期間に自分の最終的な進路が導かれていくことを願っていました。そうこうするうちに、修武が腎不全と肝不全によって天に召されました。当時、私は23歳でしたが、修武が召される少し前だったのでしょうか、礼拝の司会で講壇に立っていたときに、会衆の皆様の何とも言えない不安そうな表情が見えたのです。まるで「羊飼いを失っていく羊の群」のように見えました。そのとき初めて、私は「この会衆のために自分は立っていくべきなのではないか」という熱い思いが込み上げてきました。両親は既に私を後任にしたいと考えていましたが、そのことをあまりにあからさまに語るのも、団体の中では「世襲」の懸念から反対の声も挙がったようで、私の将来は未確定なままでした。

神学校の音楽科を卒業する頃、次の進路についてN先生に相談に行きました。私は自分の進路について、実に多くの方が色んな考えを伝えてきておりましたから、混乱し、道が見えなくなっていました。他教会での奉仕を勧める声もたくさんあり、実際にある教会からオファーも来て、もしかしたらそれが御心なのかもしれないと思うようになっていました。そのことを率直にN先生にお伝えしたところ、先生からこういうことを言われたのです。「この団体から生まれた献身者としてどう考えていますか？」それは私にとって考えたことのなかった視点でした。コーウィン先生が始め、修武・正子、N先生が継続してきたこの働きを担うよう、主がご計画をもって自分を召しておられるのかもしれないと考えるようになりました。東京福音センターを愛するよう、主が私に声をかけておられるのかもしれないと思いました。私は誰かに言われたからではなく、神と自分との関係の中で東伏見福音キリスト教会の牧師になったのです。

本論 4. テモテの立ち位置で

今日の聖書箇所は、パウロが最晩年に愛弟子のテモテに宛てて書いた手紙の冒頭です。書かれた年代は紀元 67 年頃であろうとされています。パウロはその翌年、68 年にローマで殉教したと考えられています。この手紙は「獄中書簡」「牧会書簡」と呼ばれ、牧会の働きにつまずき、意気消沈しているテモテのために、パウロが獄中から書き送った牧会的な手紙です。テモテはエペソ教会の牧師でしたが、偽教師の「教え」による混乱に悩まされていました。彼はやや気弱なところがあったのでしょう、反対者を恐れ、しまいには福音を恥じるようになってしまっていたようです。また、彼が師と仰ぐパウロも投獄されていたから、彼を精神的にサポートしてくれる存在を失っていたと思われる。そして、もはや牧会を続けることが困難なほど追い詰められていました。そのようなテモテを案じ、パウロは個人的かつ共同体にも読まれることを目的とした手紙を書き送りました。

4 節に「わたしは、あなたの涙を覚えている」とあります。この涙とは、おそらくテモテがかつて牧会者として流した涙、主に仕える涙でありましょう。そして、6 節で言われているように、彼はパウロから直接按手を受け、神の賜物（聖霊の賜物）を受けました。それは福音を理解する力であり、それを宣べ伝える力です。また、教会をまとめ、闇の中を歩む者に光を示す力でもあります。しかし、この賜物の火が消えかかるほど、テモテは意気消沈し、臆病の霊に取り憑かれたようになってしまっていたのです。更に、パウロは囚われの身でありますから、パウロがやってきたことが間違いだったと非難する者に対して、テモテは弁証することができずにいました。

パウロはそういうテモテに「祖母ロイスと母ユニケ」から受け継いだ正統的な信仰を思い起こさせ、どこに立って歩むべきかを改めて指し示しました。自分の人生の向かっている方向が分からなくなったとき、このような第三者の見解は重要です。そして、パウロは「神の力にささえられて、福音のために、わたしと苦しみを共にしてほしい」（8 節）と訴えかけます。今テモテが経験している苦難は、主イエスの十字架を担ううえで当然降りかかってくる試練であり、それは献身者であるなら誰でも通らなければならない道である。だから、同士としてこれを共に担ってほしいとパウロは求めたのです。余談になりますが、この 1:8 の聖句は、私の父が母にプロポーズをしたことばであり、その意味で母は本当に病気の父と福音のために苦しみを共にしたのだと思います。

テモテという人物の重要な特徴は、先人が蒔いた種を後から育てたということです。蒔く人があれば、それに水をやって育てる人もいなくてはなりません。そういう人生の立ち位置も重要だということを、この人を通して私は深く教えられています。東京福音

センターにおいても、コーウィン先生ご夫妻がかけがえのない種蒔きをしてくださいました。しかし、それに水をやる人がいなければ、この働きはいつか消えていってしまうでしょう。水をやるとは、福音を宣べ伝え、その地に「福音に生きる人々」を興し、丁寧に養い育てることです。テモテの立場の人間も、一代で終わるわけにはいきません。パウロが彼に後継者を育てることを求めているように、次なるテモテが必要なのです。それは、教会形成の中で見出され、育てられていくべき器です。

牧会者だけのことではありません。キリスト教会全体がそのような認識をもって、献身者を大切にし、祈り、具体的に支えていく必要があります。今、日本のキリスト教会を担う器が減ってきているとしたらどうでしょう。それは、福音を宣べ伝える力が弱くなっていくということです。私の神学校生活を支えてくださった方がこの教会にもおられました。私も同じように誰かをサポートすることで、広い意味での恩返しをしたいと思います。今日はこの礼拝にK神学生と一緒に来てくださっております。彼の将来の働き場所は多くの可能性がありますけれども、多摩ニュータウンキリスト教会の皆様にも、彼が将来すばらしい働き人として立っていくことができるように、これから4年間の学びを共に支えていっていただきたいと願います。

今朝の東伏見福音キリスト教会の週報のコラムに、「神学生サポートの重要性」という内容で書かせていただいておりますので、そこで引用している『ケープタウン決意表明』の文章を紹介させていただきます。

「ミニストリー、一致、及び成熟において教会が成長するために、聖書を教えることは不可欠である。この必要性を改めて確信し、その確信が神の全教会をとらえるのをこの目で確かめたい。キリストが教会に牧師・教師として与えてくださったすべての人々の賜物を、私たちは喜ぶ。神の言葉を説き、教える業のために、そうした人材を見出し、励まし、訓練し、支援するために、私たちはあらゆる努力をする。」(p. 69)

「神学教育は、伝道の先にある宣教の一部なのである。地上における神の使命は、神の使命に仕えることであり、神学教育の使命は教会の宣教を力づけ、教会の宣教と共に歩むことである。神学教育は第1に、牧師・教師として教会を導く人々を訓練するために役立つべきであり、誠実さと妥当性と明確さをもって神の言葉の真理を教えることができるよう、彼らを整えるものである。神学教育は第2に、神の真理をすべての社会的文脈において理解し、また適切に伝えるという宣教の務めのために、すべての神の民を整えることに役立つべきである。」(p. 90-91)

【結論】

今日はコーウィン先生ご夫妻の召天に思いを寄せつつ、自分自身の立ち位置と、更に次の世代のための祈りを込めて、語らせていただきました。コーウィン先生もまた、「一粒の麦」としてこの地に落ちてくださいました。主イエスの福音の種を持って来日し、先生に与えられた賜物をもってそれを蒔いてくださったのです。そこから出てきた芽は稔り育っています。これを大切に育て、主にお返ししたい。そして、御国において、その実りを共に喜ぶ日を待ち望みたいと思います。

【祈り】

いのちの種そのものとして世に降り給うたイエス・キリストの父なる神様。主イエスのいのちは無駄になることなく、福音のことばとして今に至るまで全世界に拡がり、多くの人を「永遠のいのち」に招き入れています。コーウィン先生ご夫妻も、奥村修武も、その意味で主イエスから受け継いだ「種」を継承し、新たな地に蒔いた人たちでした。また、それを更に育てる器も必要であります。N先生、そしてこの者も一役を担っておりますが、これからもその働きを支え、教会が力強く成長していくことができるように、導いてください。そして、そこから多くの献身者が興され、主の再臨の日までこの働きが続けられていくものとしてください。これから4年間の勉学に向かわれるK兄弟を、大きな祝福をもって導き支えてくださいますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
創造のはじめより、生命の種を地に蒔き続けてき給うた、父なる神の愛、
神との関係が失われた世に、「まことのいのち」として世に降り給いし、主イエス・キリストの恵み、
福音の前進のため、多くの働き人を興し、またその人々を支える器をも豊かに備え給う、
聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。